

平成 28 年度

研究チーム代表者 氏 名 谷守正寛

1. 研究題目：新しい日本語教育教材開発のための調査・研究
2. 研究内容：日本語教育の今後の発展に寄与するため、これまでの教科書を中心とした教材を精査したり、学習者に対するアンケート調査を行ったりするなど、各研究担当者の課題を具体的・明らかにしつつ、より新しい教材開発のために調査及び研究を行い、結果を分析した上で成果をまとめる。
3. 研究期間：平成 28 年度分は、平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
(但し総研究期間としては平成 27 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日まで継続)

【中間報告】 (1,472 字)

本研究においては、3つの主なグループで研究を行っている。

まず、1つめについては、日本語教材でみられる言葉の問題に関して、日本語の中上級レベル以上の日本語教科書の本文においては、何が学習者から見て高い障壁になるのかを明らかにする。この場合の方法としては、教科書を学習した後で、学習者に本文の内容に関する感想を自由作文で書かせる。そして、「日本語文章難易度判定システム」を用いて、本文と学習者の感想文の文章の難易度、形態素数、文型の種類などを分析し、両者の結果を比較することで「似通り度/隔たり度」を比べることである。

また、学習者に本文に対する好感度を問うことにより、受容度のレベルを考察に加え、学習者の語学力に比べて難易が高くなると、文章に対する受容度が低くなり、教育効果が下がってくるのが分かってきている。つまり、学習者からみて「教科書の文章は日常生活には役に立たない」という捉え方がされやすく、それが上級レベルの学習者の学習を阻害している原因ともなっている可能性がある。こうした問題をいかに取り除いていくかを探っている。

次に、2つめの研究については、次の通りである。留学している学生は目標言語を、様々な場面で使う機会が多くあるものの、実際にどの程度様々な場面で目標言語を使っているかということは依然不明なのである。この場合の研究目的は、日本で留学している学生が、授業外の場面でどのように日本語を使っているかについて情報を集めることにある。そこで、まず、日本語を使う場面、時間、話し相手等の情報を収集した。収集方法は、アンケートと面接であるが、アンケートでは、1週間の生活の間に日本語を実際に使用する場面に関する情報を集め、次に、面接ではアンケートによる情報にさらに補足・追加できる情報を収集して補完した。インフォーマントとなった留学生は全員甲南大学の1年間の交換留学プログラムである YIJ プログラムへの参加者で、計 12 名からのデータを集めることができた。これらのデータを検討するために、日本人の大学生(計 8 名)からもアンケートについては回答をもらったが、現在は、集めたデータを比較、検証、分析しているところである。

さらに、3つめの研究について述べる。

近年の、特に中国における日本語教育の急速な発展期における日本語教材を中心に、学習指導項目やその指導過程・順序、教育内容・題材とその扱い方、教材構成などを精査・比較している。様々なデータを集約して分析し、今後のより魅力的な教材開発のた

めに活かすことを目的として、分析を進めている。研究では、中国において2000年以降に出版された6種類の精読教科書を比較・検討するが、その中で主に『総合日語』と『基礎日語総合課程』を中心とし、そこに収録された語彙の量、品詞の種類、カタカナ語の使用状況、最新の文化に関する語彙等を取り上げる。と同時に、それぞれの使用実態の特徴を明らかにしている。

また、筆者が教材開発や授業において学生が自由作文やプレゼンテーションなどで使用した語彙・表現を収集・整理したものについて、日本語学習者に、その語彙に対する幾つかの視点からのアンケートを行うべく準備を進めている。これらの語彙には、従前の教科書においてはあまり扱われなかったものが多い。例えば、最新情報を表すサブカルチャーに関わる語や俗語、短縮語、流行語、造語などもある。そこには、学生にとっては興味を引くものも多く含まれており、アンケートの結果を受けて、今後の教材開発において使用する語彙や表現の選択に有用なヒントが得られると考えている。